





「お父さん…大丈夫？」
「ああ、帰っていたのか」
娘の存在に気付いた父親は、優しい笑顔を見せる
「学校はどうだ…」
「うん……。あのねお父さん……」
「どうした？」
言いづらそうにしている娘を見て、優しく問いかける。
「お母さんが死んじゃって寂しいのは判るけど……」
でもお父さん私にはがいるから大丈夫だよ！
それにお母さんはきつと天国で見守ってくれてるよ」

娘のその言葉を聞き、父親は驚いたような顔をするとすぐに悲しげな表情になり、そしてゆっくりと口を開いた。
「ありがとう……。お前は本当にいい子だ、きつと母さんも喜んでくれるよ……。だけどね……父さんはまだ母さんの事を忘れられないんだ……」
そらいつてグラスの酒を一気に飲み干す父。



お父さん……



ガチャ

失礼します

「珍しいわね、優等生で生徒会長の白木さんが魔術クラブに来るなんて少し棘のある言い方をする佐伯、しかし里香はそんな事は気にせず話しかける」「ちよつと相談したいことがあって……」
「ふーん、何かしら」
「実は私のお父さんのことなんだけど……」
それから里香は自分の家庭環境について佐伯に話し始めた。

「なるほどね……それで父親の事が心配なわけか」
「ええ……お父さん、お酒飲むときいつも寂しそうな顔してて、それが何日も続いているの。私、そんなお父さんを見てるのが辛くて……どうにかできないかなと思って」
里香の話は黙って聞いていた佐伯だったが

一冊の魔術書を取り出しページをめくり始めた。

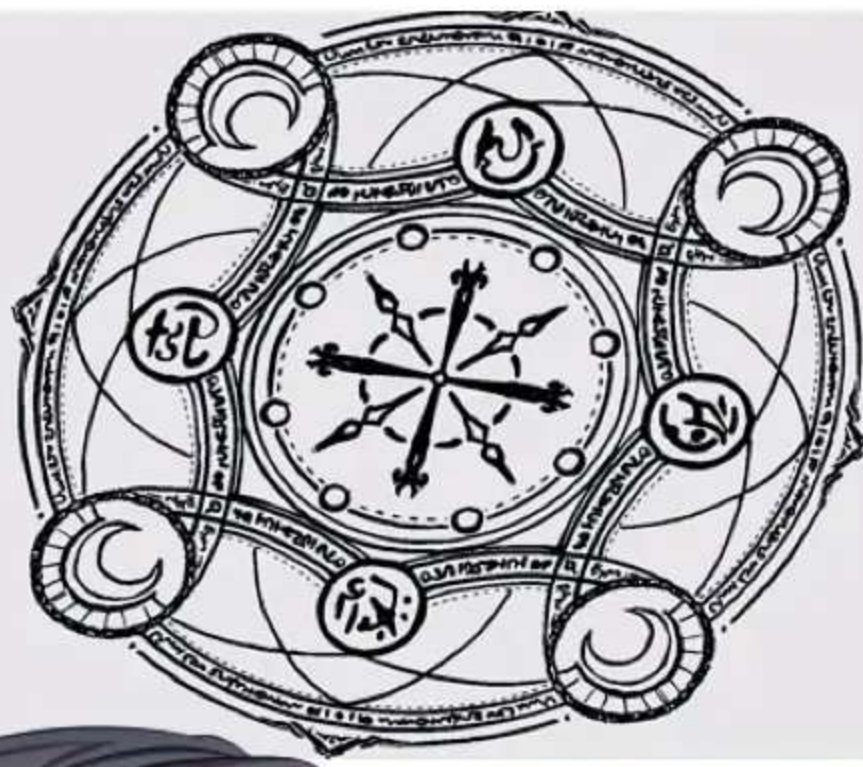
「この魔術を使えばあなたの家庭の悩みを解決できるかもしれないわね」

「えっ!? それ本当!、お願い佐伯さん、その魔術教えて!!」

「ええ、良いわよ」

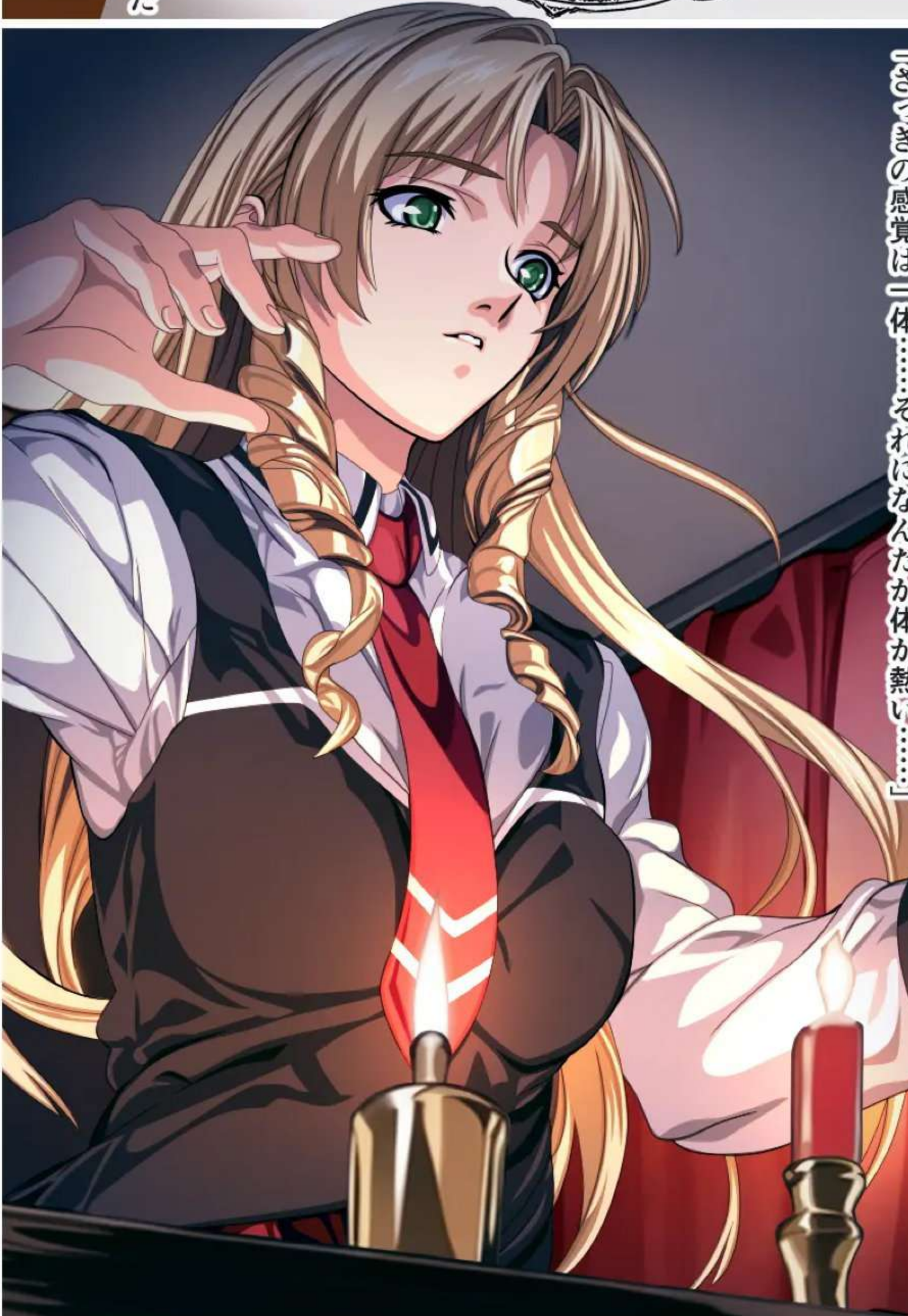
ニヤハ

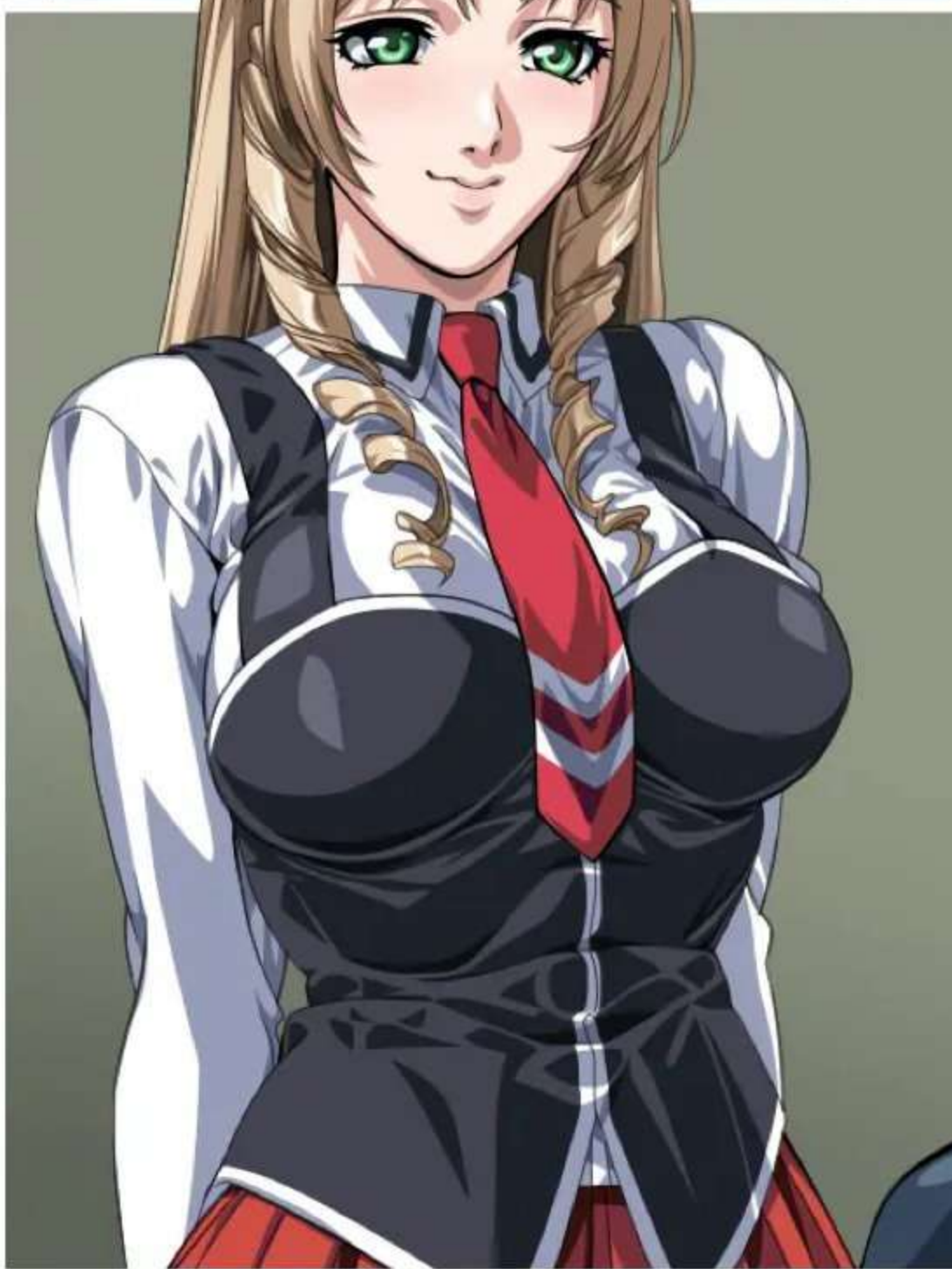
「後はこの佐伯さんに
教えて貰ったメモに書い
てある呪文を唱えれば
いいのよね……」



自宅へと帰宅した里香は
早速、佐伯から教わった
魔術を試してみる事にした

魔法陣が描かれた紙を机の上に置き緊張した面持ちで呪文を唱える里香。
「ファール、ファール、リチユ、ルエナアク……トウワウ……ン……トウア、ファウ……」
半信半疑のまま里香は書かれてある通りに呪文を唱えた。
すると次の瞬間、何かが体中を駆け巡るような感覚に襲われその場に倒れこんでしまう。
「うう……頭が……」
頭痛のような症状に見舞われるが、暫くすると徐々に治まりだした。
「さっきの感覚は一体……それになんだか体が熱い……」





「おかえりなさい、お父さん」
父親が帰宅すると玄関に里香が立っており
笑顔で出迎えてくれた。
「ただいま……里香、どうしたんだ
出迎えなんかして？」
普段なら出迎なんてしないのに里香は
わざわざ玄関にまで来ていた。
「えへへ、だって早くお父さんに
会いたかったんだもん♪」



「お父さん大好き」

恥ずかしそうにする父親だが
嫌ではないのか引き剥が
そうとはしなかった。
それどころか娘に対して
邪な感情が沸き上がってくる。



嬉しそうにそう言う父親に
飛びつき頬ずりをする。
「ちよつ、どうしたんだ里香
……そんなに甘えて」

胸板に押し付けられた胸の感触、首筋にかかる吐息、全てが心地よく感じる。
(ああ……なんだろう？これは？里香を愛しく思う気持ちが強くなっていく)
今まで感じた事のない不思議な感覚だった。
「ねえお父さん、もっと強く抱きしめて」
「はは、里香は甘えん坊だな」

言われるままに強く抱き締めると、まるで溶け合うように体を密着させ
お互いの体温を感じあう二人。
服の上からでもはつきりと判るほど豊かな乳房が押しつぶされ形を変える。
そして里香の体温や鼓動を感じている内に、どんどん理性が失われていく。

ドキッ
ドキッ
あ、っ♡

「ああ、お父さん、好きい」
潤んだ瞳で見上げながらそう呟く
愛しの娘。
目の前には魅惑的な唇が
誘うように僅かに開いている。

ああ♡

気が付けば二人は唇を重ね舌を絡ませながら濃厚なキスをしていた。
「んちゅっ……れろお……お父さん」
「むちゅっ、ちゅぱ、里香……」
（どうしたんだ、私は実の娘になんて事をしてている、これじゃあ獣じゃないか。）
頭では理解しているが体は止まらない。

くちゅっ♡

ちゅっ♡

ちゅっ♡

（いや、私は娘を愛している、だからこれは自然な事だ。
愛し合う二人に血縁など関係ない）
悪魔の囁きが父親の倫理観を破壊し、代わりに歪んだ愛情を植え付ける。

「里香、好きだ、愛してる」
「嬉しい、私も愛してるよ」
愛の言葉を囁きあい互いの柔らかかな舌を貪るように絡め合わせ
激しく情熱的に求め合う父娘。
「んっ……んん……んむう」

にゅっ♡

ぬちゅっ♡

口づけを交わしながら、父親の手が里香のお尻へと伸びる。

「ううん、だめえ……そこはあ、んっ」

娘の制止を無視してスカートをたくし上げ、柔らかくすべすべとしたお尻の感触を楽しむ。

「あん、お父さんの手、温かい……」

「里香のお尻もすごく柔らかいよ」

「嬉しい……」

グニグニと尻を揉まれる度に里香の口から甘い声が漏れる。



ぐに

ぐに

ぐに

ぐに



「里香、ここも大きくなったな」
そう言うのと里香の胸に手を伸ばす。

「あっ……」

制服越しではあるがボリュームのある大きな胸を鷲掴みにする。

「やっ、だめだよお恥ずかしい……」

恥ずかしそうに顔を赤らめ体をくねらせながら、

されるがままに胸を揉まれ感じている。

「んう、ふう、あん」

「こうやって娘の成長を直接実感できるのは父親としても嬉しいよ」



制服の上から揉んでいたが我慢できなくなったのか
里香の制服のボタンを外し左右に開くように脱がしていくと
清潔感のある白をベースに黒の装飾をあしらった
少し大人びたデザインブラに包まれた豊かなバストが現れた。

ハア……

ポ
リン
ッ
♡

「可愛いよ里香、とても綺麗だ」

「お父さん……ありがとう……」

里香は頬を染めながら微笑み、父親もそれに応える様に笑った。
しかしすぐにその笑顔は消え、変わりに欲情した男の表情へと変わる。

ヌトォー♡

♡♡♡

あ♡♡

父親は娘を抱き寄せ
ピンクの乳首に舌を這わせ舐め上げる。
「ひゃうー！お、お父さん、
そんなに舐めちゃ……やあん」

赤ん坊のように強く吸い付きながらも片方の乳房を手で愛撫し続ける。
「んっ……はあ、お父さん……赤ちゃんみたい」
「ちゅぱっ……ああ、里香のおっぱい美味しいよ」

♡♡♡

あ♡♡

ぬっや ぬっや

びい びい

♡♡♡

「やっ、そんなこと言わないでえ」
羞恥心からか顔を真っ赤にする里香だったが、
父親に胸を愛撫されるのを心地よく感じている。
「はあ……ん……ああ……ん……お父さん」

胸への執拗な愛撫の快感に足腰が震えだし膝が折れその場に座り込んでしまおう。
興奮した父親はベルトに手をかけズボンを脱ぐとパンツの中からいきり立った
ペニスを取り出し里香の目の前に突き出した。
「里香その可愛いお口で舐めてくれないか？」
「うん………わかった」

ビクッ
ビクッ

ドキ…
ドキ…





里香はイチモツの裏筋を、下から上にゆっくりと舐め上げ
少しずつつ口に含んでいく。

「はむっ、じゅる、んく……」

ペニスを喉の奥まで入れて出し入れしながら舌を使って亀頭を舐め上げ
唾液を塗りつけ滑りをよくする。

「くう、いいぞ、里香、上手いじゃないか」

頭を撫でられ嬉しくなった里香はさらにスピードを上げ肉棒に刺激を与える。

「んぶっ、れる、はむっ」

娘の肉棒をしゃぶる上手さに戸惑い、「一体誰がここまでのテクニクを
教え込んだのかと考えると、嫉妬心と怒りが湧き上がりさらに肉棒を膨張させた。

じゅぽっ♡
じゅぽっ♡

（誰だ？私の娘にこんな淫らな事を教えたのは？）

「んっ……んん……んう」

嫉妬と憤怒が入り混じった感情のまま、里香の後頭部を掴み激しくピストン運動を
始めた。

「里香、悪い娘だ、男の肉棒をそんなに美味しそうに啜え込むなんて」

「んぐう、んん、んぶう」

父親の激しい動きに苦しげな声を上げる里香だが、同時に被虐的な感覚を覚え
ゾクゾクと体と心を震わせる。

「んむうー！んっ、んっ、んっ」

「うっ、そろそろ出そうだ、全部飲むんだ里香!!!」
「んんんんんん!!!」
返事を待たずにドピュッドピューっつと大量の精液を里香の口内へと流し込む。
「んんんんんん……ごく、んくん」





ぢゅる〜

ゴクッ
ゴクッ
ゴクッ



射精が終わるとゆっくりと肉棒を引き抜き、ゴクリと音を立てて里香は全て飲み干した。「ふあ……お父さん、いっぱい出たね」口元についた精液を拭いながら妖艶な笑みを浮かべる娘の表情にゾクリとしたものを感じたが一度射精した事で冷静な思考を取り戻す。「すまない里香、つい我を忘れてしまった。大丈夫かい？」

ゴクッ
ゴクッ
ゴクッ

心配する父親の手を握り立ち上がり、乱れた着衣を正す

「平気だよ、だってお父さんの事好きだもん。それにお父さんも私と同じ気持ちなんだよね」

「えっ、ああ……」

「だから気にしないで、お母さんが居なくなっただけで元気もなかったし」

「ああ、里香のおかげでまた頑張れる気がしてきたよ」

「えへへ♪じゃあ、お父さん夕飯の準備してくるね」

「ありがたう、里香の料理はいつも美味しいから楽しみだ」

「うん、期待して待っていてね」

「ああ……」





目の前で娘の里香が汗だくで悶え、甘い声を響かせ腰を振っている。
「んあああ、いい、お父さんもっと突いてえ！」

「里香、里香あ！」

淫らに乱れる娘を後ろから激しく突く度に里香は快楽の声を上げる。

「あん、お父さん、いいよ、もっととお、もっとと激しくしてえ」

娘とはいえ久々に抱く女の肌は心地よく、禁断の関係に興奮を覚えさらに激しく腰を打ち付ける。

あははは

パンッ

パンッ

ピクン

ピクン

パンッ

ピクン

ピクン

ピクン

ピクン

あはは

パンッ

パンッ

パンッ

パンッ

「ああっ、いいっ、お父さん、好きい！」
「はあはあ……里香、もう出るぞー！」
「うん、きてお父さん、一杯出してえ！」
ラストスパートをかけ絶頂へと上り詰めるように動きを加速させる。

自分の娘に欲情してしまい夢の中で犯してしまうなんて畜生にも劣る行為だと自分を責めるが同時にある感情が芽生え始めていた。

もう一度、いや、何度もあの体を犯し味わいたいという願望が沸き上がってくる
「私は一体どうしてしまったというんだ」



突然、声を掛けられたことで驚き視線を向けるとそこにはネグリジェ姿の娘がいた。

「里香…、どうしたんだこんな夜中に、それにその恰好…」

ゴクリと喉を慣らし、娘の姿をまじまじと見つめる。

透けるネグリジェからは下着がうっすらと見え、そこから伸びる太腿と脚は白く艶やかで
思わず見とれてしまいたいそうになるほど魅力的だった。

さらに豊満な胸がその存在を主張しており目が離せなくなってしまう。

「うなされてたみたいだけど大丈夫？」

「え、ああ、心配かけてすまなかった、大丈夫だから」

「よかった…、ねえ今日は久しぶりに一緒に寝てもいいかな？」

その言葉にドキリと心臓が跳ね上がる。

「おい、何を言っているんだ…」

「私も怖い夢みちゃって一人で寝れないの」



父親の返事も聞かず里香はベットのの中に潜りこんでくる。
「こ、こら里香……」

腕を絡め太ももに足を巻き付けるようにして体を密着させてくる。
「お父さんあったかい……安心する」

何とか理性を保ちつつ引き離そうとする父親だったが
里香は離れようとしない。それどころかより強く抱きついてくる。

モゾモゾと下半身の割れ目を擦りつけるように動かし、
耳元で甘く呟き首筋に舌を這わせてくる

「お父さん……好き……」
「ダメだ、里香」

んんんん

レニん
サワ
サワ

ずん
ずん

あ
あ

もぞもぞと里香の片手が下半身に伸び、反り立っている
肉棒がそつと握られる。
「んっ……お父さんのこころ、すごく大きい……」
そのまま上下に手を動かされ快感が襲ってくる。

「どう、お父さん、気持ちいい？」

「くっ……やめなさい里香」

父親の言葉を見無視し上下に動かすと
先端部分から透明な液が出てくる。

それを潤滑油にしてさらに速く手を
動かしていくと父親の口から
声が漏れる。

「くうっ……里香、もう、許してくれ」
「ふふ、お父さん可愛い……」

ヒクヒク
しゃっ
しゃっ
しゃっ
しゃっ

里香は体を起こし父親に跨り肉棒を自分の股間に擦りつけ始めた。

「んんっ、はあ……」

熱い吐息を漏らしながら腰を動かし続ける。

「お父さんも動いてよ、一緒に気持ちよくなるろう」

娘の誘惑に抗うことができず、ゆっくりと腰を動かす始める。

ズリユツ
ズリユツ
ズリユツ
ビュッ

「ああん……いいよお父さん、もっと激しくしてえ」

言われるままに動きが激しくなっていく。

「はあ……はあ……里香あ」

「ああん、お父さん、好きい」

父親の腰の動きに合わせるように

里香も体を動かす快感を貪っていく。

「ねえ、お父さん、入れていい？、いいよね？こんなに大きくなってるんだし」

父親の肉棒を握りしめ切なげな目で訴えてくる。

「はあ……はあ……里香……」

はあ
はあ

（私は里香を愛している、愛し合う二人が求めあうのは当然の事だ、娘もそれを望んでいる、そう、これは何も間違っではない事だ……）

「ああ……分かった、里香の好きにしなさい」

父親の言葉を聞いて里香は嬉しそうな表情を浮かべるとパンティをずらし自分の秘部に肉棒を突き刺していく。
「んんっ……」

ズブズブツツという音と共に肉棒が飲み込まれていく感覚に襲われる。
その瞬間、ゾクリとした快感が背中を走り抜けた。

「くうっ……」
「ああんっ、お父さんの大きいよお」
根元までしつかりと飲み込むと里香は腰を上下させ始めた。



「あっ、はあ、いいっ、お父さん、好きっ！」

パチュンツパチュンツという音と共に肉同士がぶつかり合う音が響き渡る。
そのたびに里香の口から甘い声が漏れる。

「ああ……はあああん……」

父親の上で淫らに踊る姿は美しくグチュグチュと卑猥な音を響かせ里香は腰を振る。



「んうっ、ねえお父さん触って」
そういうとネグリジェの胸元をはだけさせ、
たわわな乳房がこぼれ落ちる。
「ああ……」

はー……
はー……
はー……
はー……

アイッ

アイッ



誘われるように手を伸ばし胸を揉みしだくと里香は
嬉しそうに微笑んだ。
「はあ……ああん……お父さんの指、気持ちいい」
揺れ動くやわらかな胸に指が食い込み
形を変えるたびに里香の口から吐息が漏れる。

ハア
ハア

ビク
むに

ビク
むに

むに
むに

その反応を楽しむように父親は激しく強く
乳房を揉みしだき、里香は快感に身をくねらせる。
「あん、ああ……はあ……はあ……」



ちゅっ♡

ちゅっ♡

はぁ

ちゅっ♡



興奮した父親は体を起こし力強く娘の体を抱きしめると
里香は父親の首に手を回し唇を重ねてきた。
「んっ……んん……」

舌を絡ませ唾液を交換するように激しくキスをする。
その間も腰の動きが止まることはなくお互いの快感を高めていく。
「ふはぁ……お父さん、もつと一杯動いてえ」

んっ♡

ちゅっ♡

むっ♡

ギョッ

おっ♡

おっ♡

おっ♡

おっ♡

もう我慢できないといった様子で里香はさらに

強く腰を打ち付けてくる。

それに合わせ父親も下から突き上げる動きを強くした。

「ああっ！いいっ、凄いい！」

激しい動きに里香の口からは喘ぎ声が漏れる。

「んっ、はぁ、ああん！」

ギョッ

鳥のさえずりが聞こえる、それと同時に声が聞こえる

「……さん、お父さん、早く起きないと会社に遅刻しちゃうよ」

「ん、うんー、はっ、里香!!!」

娘が目の前にいることに驚き慌てて起き上がる。

「きゃっ、お、おはよう、お父さん」

「ああ、おはよう……じゃなくて!り、里香、その、あの……」

言葉に詰まる父に対し娘は不思議そうな表情で見つめる

チュン

チュン



「どうしたの?変な夢でもみちゃったの?」

いつも変わらない様子の娘を見て昨夜の事は夢だったのではと頭が混乱する。

(夢?、あれは夢だったのか?いや、あの感触、匂い、快感、あれが夢なわけがない)

「もう、ほら起きて朝ごはん出来てるから」

そう言っている制服姿の里香を見ると下半身に血液が集中して来て硬くなる。

「り、里香……」

手を伸ばし父親は制服姿の里香を抱き寄せると制服の上から胸を揉みしだく。

「ひゃん、ちよ、ちよっとお父さん？」

突然の行動に驚く娘を気にせず父親はスカートを捲り上げパンティの上からアソコをいじる。

「ああん……だめえ……こんな朝から……」

「はあ……はあ……」

むにゅん

むにゅん

スツ

スツ

スツ

スツ

スツ

あま

興奮した様子で娘の体を触り続ける。

「ああっ！お、お父さん！？」

父親からの愛撫に感じてしまい里香の吐息が漏れる。

クチュクチュという音が響き始めたところで父親は勃起しているペニスを里香の股間へと宛がう。

ズプププププツ

「ああああんっ！」

一気に奥まで挿入された衝撃で里香は体を仰け反らせてしまう。

「はあ……はあ……、お父さんったらあ」

潤んだ瞳で見つめてくる娘に興奮し父親はピストン運動を開始した。

パンツッ！パアンツッ！グチュッ！ブヂュッ！！ヌチャアツッ！ズブツッ！グチャツッ！ニヂュンツッ！ズブツッ！！

激しく腰を打ち付けるたびに肉がぶつかり合う音が響き渡る。

「はあ……ん、いいっ！いいよお！！」

激しいピストン運動に里香は悦びの声を上げる。

「くっ……里香あ！」

（ペニス全体を熱く優しく包み込むようなコノ感触、やはり昨夜の事は夢じゃないく現実だ）

娘の膣の感触に興奮する父親の腰はさらに加速していく。

「ああっ！すごっ、すごい！！」

あぁあぁ

ビクビク

びゅんびゅん
びゅんびゅん

里香も快感を求めて自らも腰を動かしている。

「くっ、里香出るぞ、出すぞっ！！」

「きてえ！お父さんの精液で私を満たしてえ！！」

次の瞬間、大量の精子が里香の子宮へと注ぎ込まれていった。

「ああああー！！！！」

一線を越えてしまった二人はその後何度も肌を重ね禁断の関係を続けていた。
避妊もせず愛欲にまみれたセックスを続け欲望のまま交わり続けた。



ビクッ♡

あま♡

ビクッ♡
ビクッ♡
ビクッ♡

あま♡

それから数カ月、里香は父親の子供を身ごもってしまった。

「はあ、はあ、おお、里香、里香！」

今日もまた父親は里香を犯し続けていた。

「ああ、お父さん、そんなに強くしたらお腹の赤ちゃんがびっくりしちゃうよお」

里香の大きくなった腹部を撫でながら父親は狂ったように腰を打ち付ける。

「すまない、でも止まらないんだ」

「いいよ、お父さんのしたいようにして、大丈夫、きつと元気な赤ちゃんが産まれてくるよ」

里香は優しく語りかけ父親の頬を撫でてあげる。

「うう、里香、出すぞ！またお前の中にとっふりと出してやるからな」

「来て、お父さんのせーえきいっぱいちょうだい！」

ツブツブ♡

あー♡あー♡

むい♡

むい♡

むい♡

あり♡

あり♡

あり♡

あり♡

びゅー♡

んんん♡

ドクンドクンと脈打ちながら熱いものが流し込まれる。
「ああ、すごい量、赤ちゃんにかかっちゃおうよお」
そう言いながらも里香は嬉しそうな表情を浮かべ父親の欲望を受け止めていた……



「はい？」

「あつ、高城です、白木さん？」

「え、高城先生ですか？」

「ええ、白木さんもう三カ月も学校に来ていないじゃない、それに電話にも出ないからどうしたのかと思って様子を見に来ただけけど」

「そうだったんですか、すみませんわざわざ家まで来てもらって」

「いいのよ、それより白木さんの体調でも悪いの？」

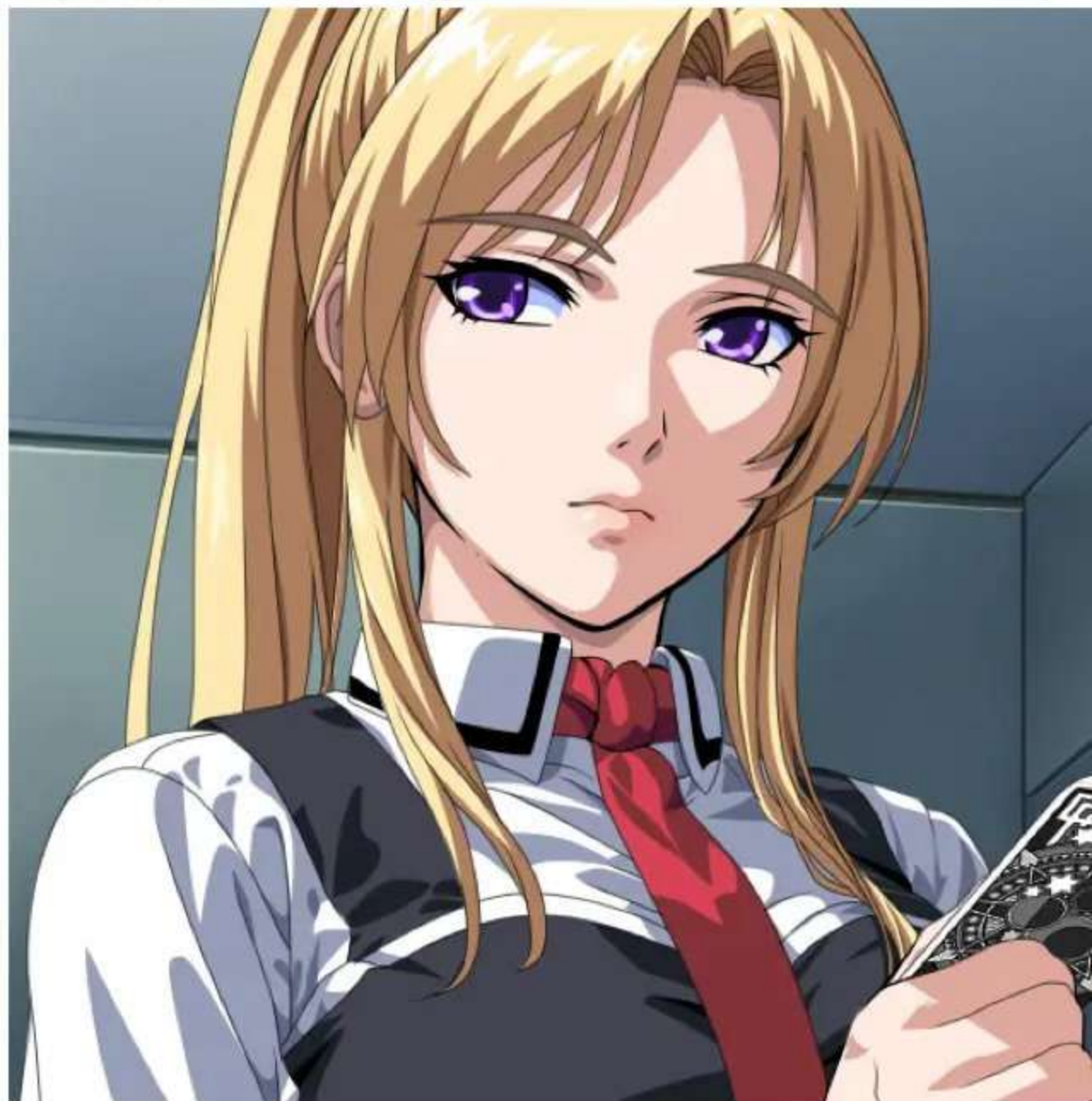
「いえ、特には問題ありません、ちよつとお腹が大きくなってるくらいで元気ですよ」

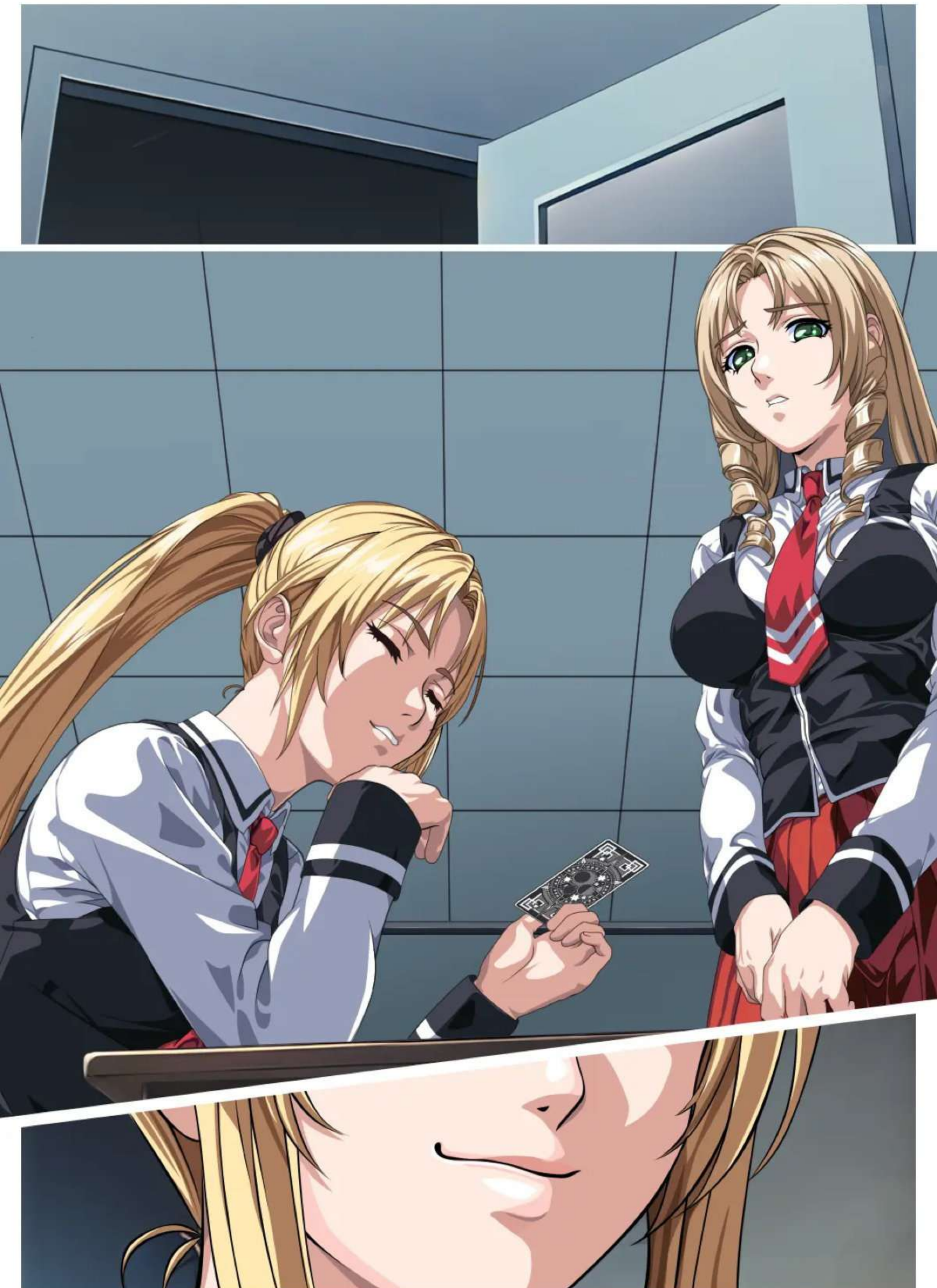
「お腹？……」

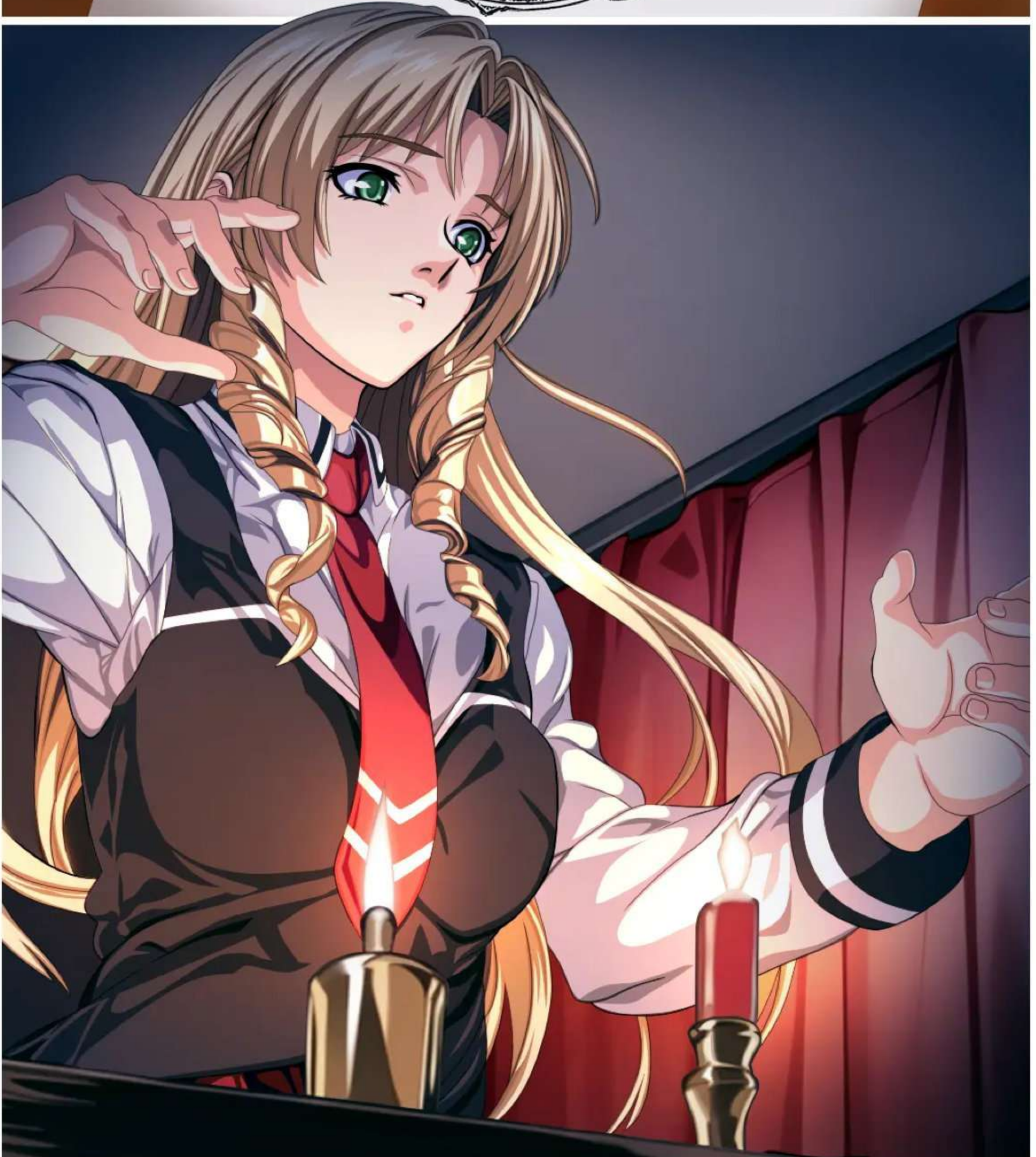
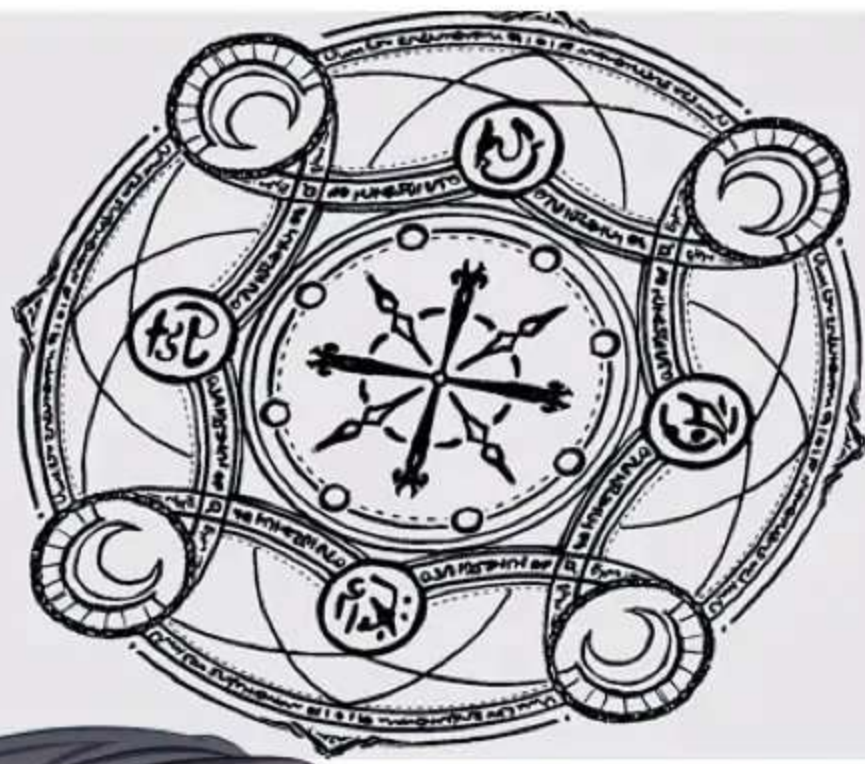
「ええ、玄関のドアは開いているので家が上がって中でお話しましょうか」
「言われるがまま、高城は玄関のドアを開け白木家の中へと入っていった。」

END



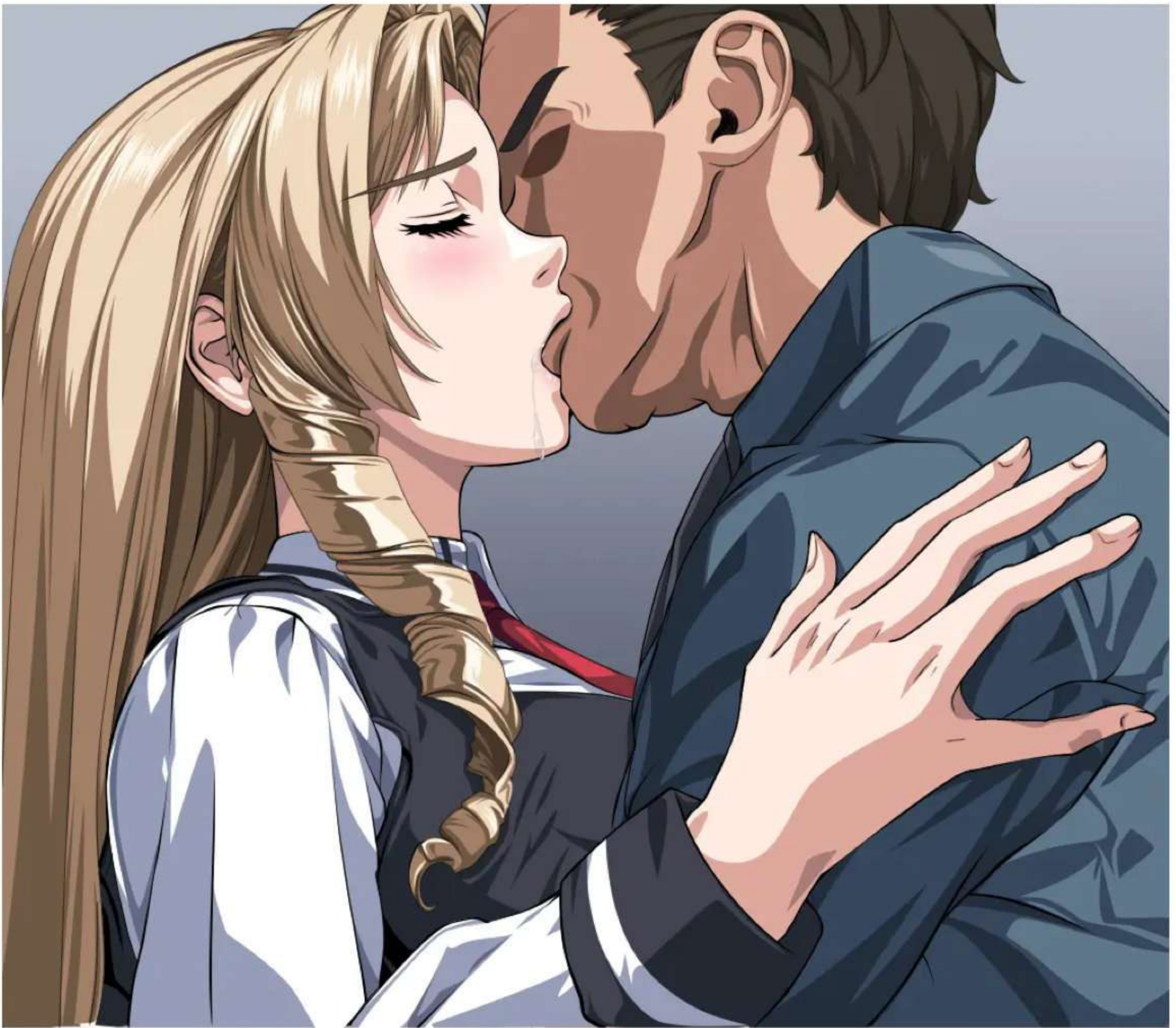




















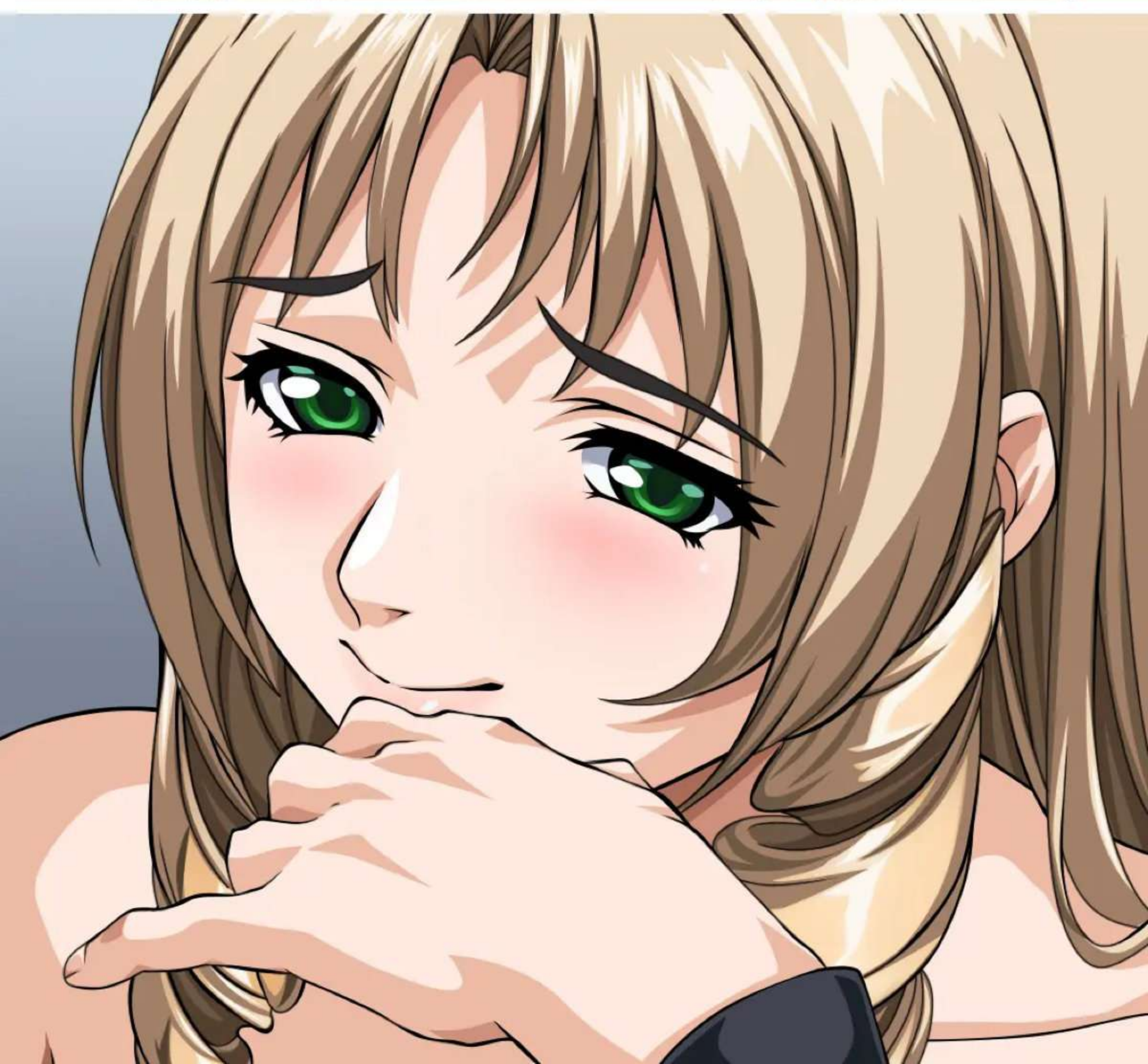
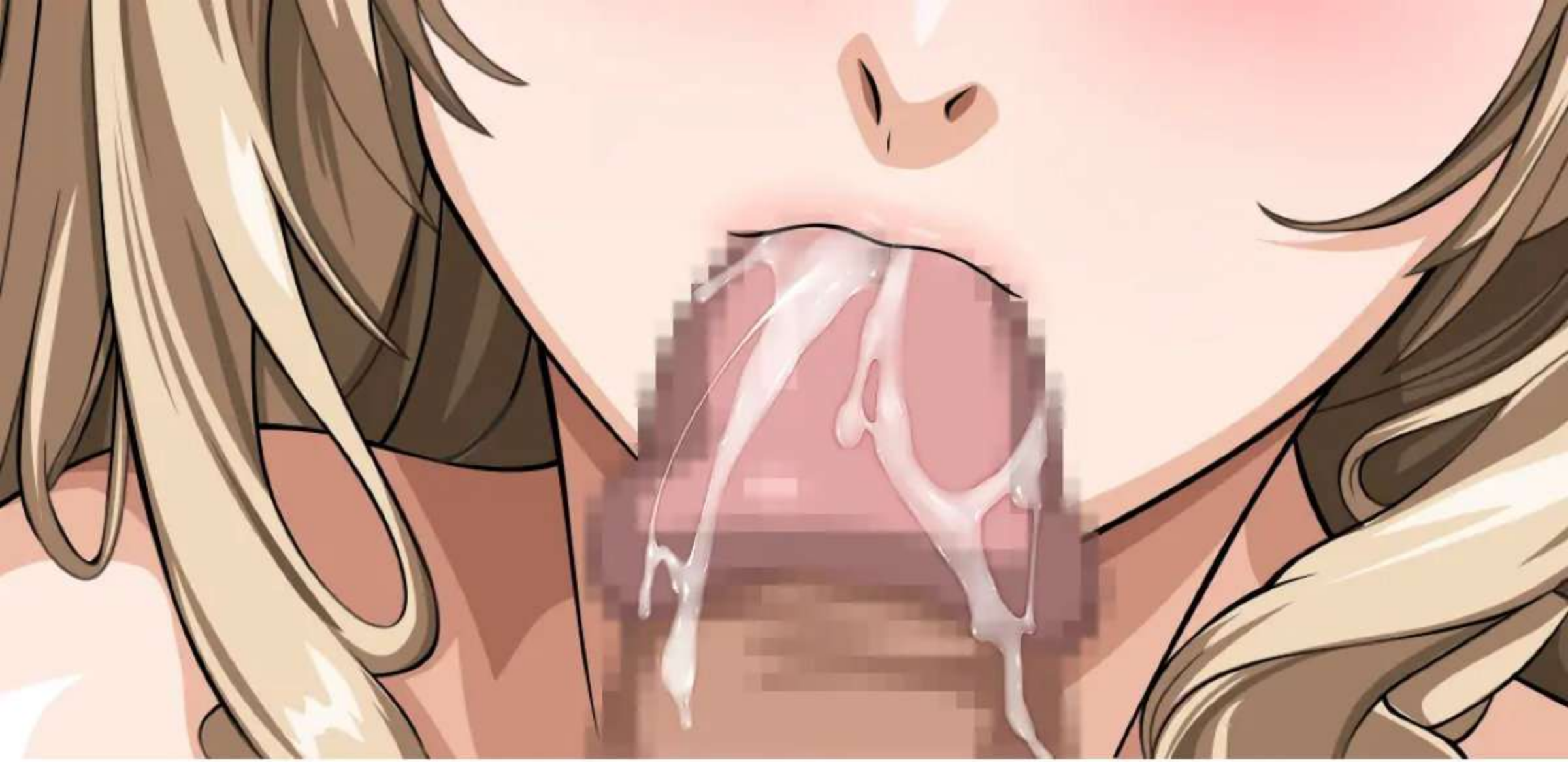
















[Redacted text]

















